

幼児の教育

'96
2月号

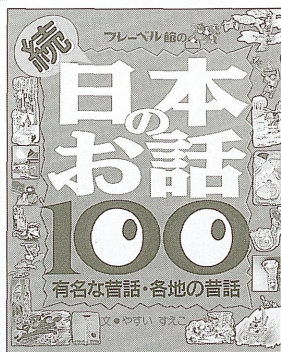
家庭—保育所—幼稚園



続

日本のお話 100

子どもたちに読み聞かせたい日本の民話昔話100話を厳選、掲載しました。一話一話を読みやすい長さにとまとめ、美しい挿絵をそろえました。子どもから大人までがともに楽しめるものです。



掲載したお話 (例)

●有名な昔話

おむすびころりん・たなばた
牛方と山んば・桃太郎・一寸法師
花咲かじいさん・かぐや姫

●各地の昔話

大だこの帽子 (北海道)	鉢かすき姫 (大阪府)
雪女 (青森県)	食わず女房 (広島県)
種まきごんべえ (東京都)	正月の神様 (徳島県)
天の羽衣 (静岡県)	とっくひっく (大分県)

文・やすいすえこ 絵・石倉欣二 他

AB判・336頁(4色・80頁、2色・256頁)・定価2,200円(本体2,136円)

続

世界のお話 100

グリムをはじめ、読みつがれてきた世界の名作を中心に100話を厳選、掲載しました。第一線で活躍している画家の美しい挿絵が、読み聞かせの世界をさらに広げます。子どもから大人までがともに楽しめるものです。



掲載したお話 (例)

●グリム

赤ずきんちゃん・金のがちょう・白雪姫・おおかみと七匹のこやぎ

●世界の昔話

スーホの白い馬・大きなかぶ・七つの星・おだんごパン・手ぶくろ

●有名な作家の童話

そんごくろ・三匹のくまのお話・三匹のこぶた・賢者の贈り物・ジャックと豆の木

●アラビアンナイト

四つの色の魚・アラジンのランプ・のろまなハッサンとろば

文・やすいすえこ 絵・末崎茂樹 他

AB判・336頁(4色・80頁、2色・256頁)・定価2,200円(本体2,136円)

キンダーブックの
フレール館

幼児の教育

第95巻 第2号



幼児の教育 目次
 — 第九十五卷 第二号 —

© 1996
 日本幼稚園協会

子供讃歌……………	4
〈巻頭言〉幼児教育の生々……………	6
青木 久子……………	
生きがいへの転換……………	8
津守 真……………	
震災後の子どもたち(5) 長男と野球と震災……………	13
宝満 博子……………	
教育における「音楽」の役割……………	18
— 即興アンサンブルの試みを通して —……………	
村山 順吉……………	
トボスにおける発達 第六回 保育における一回性と普遍性 無藤 隆……………	26



ある日の育児日記から⑥……………佐藤 和代… (35)

子どもたちへのまなざし⑪ ルンルンのゆりかご……………松井 とし… (36)

園長室の窓から⑥ 特色ある園経営……………原口 純子… (38)

動物園の愉しみ^{たのしみ}……………並木美砂子… (46)

『十里霧中』―息子たちのイギリス公立校体験記③―……………豊田 一秀… (53)

「先生、きれいなお花があった」……………岩上 節子… (59)

表紙絵・いわむらかずお（「なにかありそうだ」）

扉題字・津守 真

扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット・彌永たたえ（冬海・人魚の海）

編集委員・田代 和美／榎田 正子・伊集院理子

編集部・仲 明子



子供讃歌

お部屋の中はあたたかい

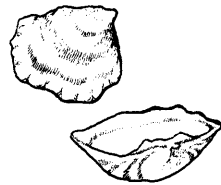
撮影・平野 清





幼児教育の生々

青木 久子



いつの時代も、幼児教育は純情なる人々の情熱によって支えられ発展してきた。生活によって自己陶冶するというその教育の方法は、余りにも高尚で本質的なるが故に、また対象が幼いが故に、教えることを旨とする学校教育からは特別視され、世間からは軽んじられるのであろうか。「保育料は駐車料金と同じ?」、それが、一般社会の保育価値に対する

評価とすると、日本の保育に対する意識は余りにも貧しすぎはしないかと思うのである。

しかし一方で、「真実」とはささやかな見えにく

い営みの中にあるのかもしれないと思う。保育を女性に依存してきた男性中心の社会は、保育システムを社会の下位に位置付けてきた。こうして置かれた保育界の状況がハングリーなだけに、一人一人の情熱がこれを支え、曇らない目で社会を見るのだから。

宗像誠也が「教師と子供の接触の機微——これが教育の本質である」とした戦後の民主主義教育の出發が、いつしか高度成長の波に巻き込まれ、教師と子供の関係を上下にし、接触の機微の中から人間の

生き方を伝え合う時を奪っている。

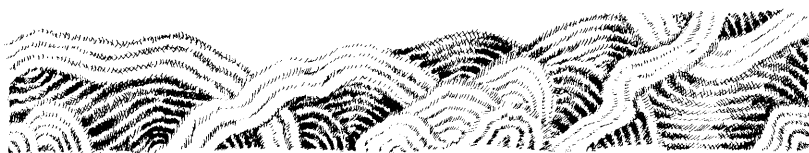
次の時代、戦後、私たちが求めた物質的な豊かさのつけを払うために、保育者も保護者も、あるいは地域の人々や行政も手を携えて、新しい生活世界を創造しなければならぬ。その時、子供から出発する幼児教育の実践の質が問われるのだらう。

それは、幼児教育の基本である「環境を通して行う」という理念をどう実現するかということである。一つは、幼児の生活や遊びを充実するための園の環境作り、環境としての保育者の接触の機微の在り方というミクロな視点と、もう一つはそれぞれの土地に根ざした教育の生々というマクロな視点から、保育の再考が始まるに違いない。昨今の地方自治の活性化、教育・福祉の民営化という声は、地域共同体の生々と保育の生々をからめて進行していくだらう。もともと保育は地域の自然や文化、人々の

暮らしと一体となって営まれてきたものである。その地域社会の環境が保育の内容をつくってきたと言っても過言ではない。「わが温泉町は、すべての必要とする幼児に福祉と教育を保障する」「保育園、幼稚園、小学校、地域社会の人々が共に複合施設で学び合い助け合う生活から、町づくりが始まる」、そんな意識のわが町、わが村の保育を語る方々にお会いするようになった。

教育が、地域社会の個性の発揮から始まり、家族全員が生々自生する生活作りから創生すると思うと、また新しい期待がわいてくる。そして、こうした変化の激しい時代、どうせ流されるなら、その流れの中で幼児教育の本質だけはしっかりつかんで離さないという、実践者の自負と責任をもちたいと思うのである。

(青木幼児教育問題研究所主宰)



生きがいへの転換

津守 真

人は自分が選んだのではない運命を生きねばならないことがある。そのときに、自分にはもっと違った人生があったはずなのだと思うのでなく、自分が投げ込まれた状況と本気に取り組むことにこそ真の人生があるという思い方をし、明るく精一杯にそれに立ち向かうと、いままで知らなかった新しい世界が開けてくる。

養護学校に子どもを連れてくる親たちを見てみると、そのことをつくづくと感じさせられる。だれも自分で選んで障害をもった子どもを生んだのではない。その逆であ



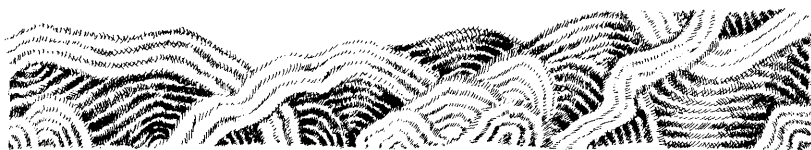
る。思いがけず自分の子どもが歩けない、ことばを話さない、激しい発作を起こす。そのようなことに遭遇して、親はショックを受けて眠れぬ夜を過ごし、未来が閉ざされたような気になる。そこに人間の原型がある。そして、そこから立ち上がったときの親の明るさに、私は人間の尊厳さを感じさせられる。

このことが起こるのは子どもの幼児期である。

しばしば、親はそのショックから立ち直れず、その間に障害の子どもを自分の生活から切り離し、早くから自分の目に見えないところに隔離しようとの考えを起こす。あるいは、普通の子どものレベルにまで引き上げなければその子の価値を認めない。その場合には子どもは最初の障害に加えて、もうひとつ重荷を背負うことになる。親からも見放されたという、ずっしりと身にこたえる重荷である。

どの親も、そんな重荷を子どもに負わせたいと思っではない。それを促すのは社会である。専門家をも含めて周囲の人々の考え方である。これまでの社会には障害に対するマイナスの力が強かった。いまや世界中がこの点で変化しつつある。国際障害者年、人権思想の普及など、多くの人々の社会的努力は大きく、それを考えると環境問題など暗いことの多い私共の世界にも希望が生まれて来る。

一時はショックを受けた親たちも、自分が選んだのではない運命を肯定的にうけと



めて生きようと考えるようになったとき、親も子も成長し始める。それはあきらめではなくて、だれでもが対等に生きるという人間観への変革である。

保育者がすることは、子どもの保育の実践を通じてである。保育者自身が子どももあるがままで価値あるものと心から認め、子どもが今日の一日を楽しく過ごせる日とする保育をすることである。それができるとき、保育者は親と語る者となり得る。

親が子どもに向かう覚悟を決めるには、他の人の助けを必要とする。日々の小さなできごとと一緒に語る人を必要としている。子どもと向き合う原点は、一度わかればそれで済むというものではない。何かが起こるたびに原点は確認し直さねばならない。子どもが電車やバスの中で大きな声を出したとき、同年齢の他の子はいないようなことをしたとき、人の目は殊更に鋭く感じられる。こんなとき、何故自分だけこんな目にあわねばならないのかと、自分が選んだのではない運命に不平不満を言いたくなる。このことは保育園や幼稚園、学校の保育者も同様であろう。

自分が選んだのではない運命を自らの身に引き受けて明るく生きていく最大の人へは、障害をもって生まれて来た子ども自身である。

発作が起きそうになると、子どもは大人の傍らに来て座り直し、その時を耐えやす



いようにしている。そのことに気が付かないで、何故こんなに抱っこを要求するのかと考えるのは大人である。発作が終わると次の瞬間には、子どもは何事もなかったかのように遊び始める。普通の大人だったらこうはいかないだろう。この子どもたちは大人も及ばない自我の力を発揮している。

私自身、障害をもつ子どもの保育を始めたとき、これらのことが分かって始めたのではなかった。養護学校に来る子どもたちが、元気に幸せに生きるようにと願って毎日一緒に生活するうちに、この子どもたちはなんと人間として立派なのだろうと分かるようになった。障害をもって生まれたということ自体、子どもが自分で選んでそうしたのではないのに、だれを恨むのでもなく、笑ってその時を過ごしている、その生き方は私共が日々学ばねばならないことである。

私は毎月、私の学校の母親たちと懇談している。それを教養講座と名づけている。ちょうどこんなことを考えていた日、話題が、自分で選んだのではない運命や境遇、事故や災難と取り組んで、そこに自分を見いだすことが人の生きがいであることに話が及んだ。ある母親が、自分たちはこういうことはよく分かるが、若いときは、船出して冒険することの方を考えていた。この矛盾をどうしたらよいのかと話した。私は、この両者は矛盾ではない。最初のことにはしっかりと腰を据えてその土台の上に、



船出がある。これから私たちそれぞれに船出があるのではないかと話した。そのことは多くの母親に共感されたようだった。

しばらく休んでいたT男が登校した。久しく見ない間に急に身体が大きくなり、青年になったように見えた。私が傍らにいくと、すぐに親しみを寄せて私の手を引き、学校中歩き回り、おもちゃ箱をのぞいた。T男が肩で風を切って傍らを通ったとき、若い実習生は思わず身をよけた。本人は小さいときと変わらない気分なのだろうが、身体が急に大きくなるとまわりの人の目に変化する。これは成長に伴う危機である。幼いときから能動的に生きる体験を積んだ人は、自分が選べないことの多くある運命の中でも、元気に主体的に生きる下地が作られていると思う。

(愛育養護学校)

震災後の子どもたち(5)

長男と野球と震災

宝満 博子

長男は、小学六年生。Jリーグのブームによってサッカー少年が急増している中、サッカーには見向きもしない根っからの野球少年である。小学一年生ではまだ早いということで二年生になるのを待って、四月早々、軟式少年野球、妙法寺チームに入部した。毎週土、日曜日の練習を繰り返し、先輩たちの試合の様子を目にし、耳にし、自分たちも早く六年生になって試合に出たい、と思いをふくらませて

いた。

平成七年正月、前年十二月に六年生は退団し、最上級生となった長男たちは、そのシーズンの必勝祈願の初詣の様子を取材されることになっていた。地元のK新聞の方が来られ、近くの神社で、新六年生十八名、優勝を目指し新たな気持ちで参拝した。いよいよ自分たちの番がやってきた、と期待と緊張が伝わってくるようだった。この時の様子は二月一日

の新聞に載るはずだった……。

そして、一月十七日、全く予想もしていなかった、想像を絶するあの地震が起こったのだ。神戸という所は台風の被害も少なく、ましてや地震というものとは無縁の場所だと思っていた。全く何の防護もしていなかった。あの激しい揺れでタンスの上の物が落ち、子どもたちの勉強机や本箱の本はすべて落ちていた。食器も数個、食器棚からとび出し割れていた。近所には、瓦が落ち、家の外壁に多少のひびが入っている家もあった。しかし、我が家の周りの被害はその程度だった。同じ須磨区でも、海沿いの被害はひどい。古い家屋は倒れ、その上、火が出て一面焼け野原になってしまった。幸運と不運を分けた活断層の仕業に、ただただ従うしかなかった。

地震直後は、余震の不安と断水のため、我が家も一時、西神の実家に避難した。学校は一月いっぱい

休校となった。

こんなことがあっても、実際、子どもたちは無邪気である。時々、グラツとくる余震にも、「きゃー!」と、つい声を出してしまうのは私の方で、子どもに言わせると、「お母さんのその声の方がかわいい」らしい。電気、ガスは当初から使えたが、断水している間の水くみも、近所の子どもたちとバケツリレーで、寒い中、服をぬらしながらも楽しんでいった。休校中は、トランプをしたりファミコンをしたり、さすがに外へ出て遊ぶ子どもはいなかったが、家の中で、こんな時だから勉強しなさいとも言われない自由な時間を満喫していた。

二月に入り、小、中学校、幼稚園（一部地域を除く）が再開された。幸い、子どもたちが通っている若草小学校では、先生方も生徒も全員無事だった。

授業の方も少しずつ始まり、すっかり普段の生活をとりもどしていった。こうなってくるといつまでも



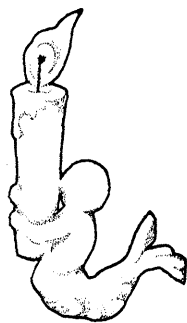
家の中でじっとはしてられない。学校に行っても野球部のメンバーから、

「野球はいつから始まるの」

「今年、試合はどうなるの」

と、頻繁に聞かれるようになった。本来なら二月四日から練習を始めているはずだった。早く野球がしたい、という気持ちがひしひしと伝わってくる。地震直後の被害の様子をテレビや新聞で見ているとても野球のことなど口にする気にもなれないが、子どもたちの気持ちを代表して伝えるべく部長宅に電話をかけてみた。練習グラウンドである妙法寺小学校は避難所となっていて、約百名の方がおられるとのこと。グラウンドは駐車場になっていて、学校自体、体育の授業はできないし、朝会もグラウンドの端の方でしている状態だという。妙法寺小学校の野球部のメンバーの中には避難している人はいないが、職場が被害を受けているという人は多くいるら

しかった。また、同じ西リーグの十三チームのうち、避難所暮らしをしていないのは妙法寺と花谷はなたにチームだけで、残りの十一チームは、須磨区でも南の方や長田区に位置し、被害がひどく、家が全壊していたり焼失してしまった人もいて、大変なことになっているとのこと。公式試合によく利用していた須磨海浜グラウンドや遠矢浜グラウンドはガレキ置き場となっているし、南駒栄グラウンドは避難所としてテントが一面張られているし、空き地という空



き地には仮設住宅が建つ予定で、練習する場所がない。試合も今シーズンは開催の見込みは皆無。指導者も含め、皆、自分の生活が先決で、野球どころではないとのことだった。六年生にはかわいそうだがこればかりはしょうがない、という話だった。わかってはいたものの、こうはつきり言われてしまうと絶望的だった。世間でも、高校野球の春の選抜大会をするかしないかが注目を集めていた。子どもたちは、もてあますエネルギーを自主トレという形で発散させようとしていた。

家のすぐ近くには、砂場があったり、ブランコ、すべり台があって、小さい子どもたちが遊んでいる公園がある。その横で、キャッチボールをしたり、内野だけの守備練習を始めた。危険のないよう、小さい子どもたちが遊ぶ時間帯は避け、必ず親が付き添うことにした。少し離れた所には学校の運動場を少し狭くしたぐらいの広場ある。そこへも時々は

行って、外野のノック練習や試合形式の練習をしたりしていた。バッティング練習は新聞紙をまるめて作ったボールで行った。しかし、この大きい公園はもともとサッカーの練習に使っていたため、同じ六年生のサッカー部員と場所の取り合いでトラブルとなり、野球部は身を引くことになった（後に、この大きい公園にも仮設住宅が建った）。

選抜高校野球の開催が決まり、諦めかけていた気持ちに少しの希望がもてるような気がした。ちょうどこの頃、花谷チームが、唯一学校のグラウンドが使えるということで、「震災に負けるな」と西リーグの全チームを招いて練習試合を計画してくれた。午前午後に分かれ、昼食時には豚汁とおにぎりを作ってくれていた。久しぶりにグラウンドで思いっきり野球ができて大満足だった。花谷チームのおかげがあって、この練習試合をきっかけに春季大会が始まることになった。思ってもみなかった試合の話

に興奮してくると共に、練習ができていないことに不安を隠しきれない子どもたちに代わって、部長に、学校での練習再開を懇願したが、七十名程の避難している人に迷惑がかかるといけない、ということではなかなか許可が出ない。何度か交渉し、範囲を狭くして車には当たらないように工夫するということと、少しずつ練習を始めた。

日がたつにつれ、避難している人の数も減り、夏休み中には避難所解消となり、やっと例年通りの練習ができるようになった。夏休み中には、「がんばれ神戸っ子復興支援親善交流少年野球大会」と称した過去にはなかった市外のチームとの交流試合も何回かすることができた。夏のオール神戸軟式少年野球大会、秋のリーグ戦と、振り返ってみれば、一時はどうなることかと思っていたが、ひと通りの試合も行うことができ、もうすぐ退団式を迎えようとしている。春の大会ができることになり、開会式で、

両リーグの会長の、「私の家はこの度の地震で、倒壊、全焼してしまいました。すっかり落ち込んでいましたが、子どもたちの元気に野球する姿にとても勇気づけられました」という言葉がとても印象的だった。大人はすぐに後ろを振り返り、昔はよかった、と今の自分から目をそむけがちである。しかし、子どもはちがう。被災の程度には差はあるにしても、皆元気で前向きだと思ふ。野球をしている姿は本当に楽しそうで満足感に満ちあふれている。

前代未聞の大震災から約九か月。いつまでも起こってしまったことに固執してはいられない。長男の野球を通して忙しく月日が流れ、次の試合、次の大会と、絶えず前を見つづけることが、原動力となつていることを感じる今日この頃である。

(神戸市在住)

教育における「音楽」の役割

—— 即興アンサンブルの試みを通して ——

村山 順吉

赤ちゃんが、まだ母親の胎内にいる時から、様々な音を聴き、或いはそれに反応することは、よく知られている。また、まだ言葉が言えるかどうかという時期の幼い子どもが、大人が理解に苦しむような音楽に、静かに聴き入ったり、反対に大人が喜んで聴いている音楽に、唯一人怯えたように泣き出した

りする、その子ども独自の感受性による反応を示すことも、事実なのだ。そして幼い子ども達は、彼等

の泣き声の微妙な変化ひとつにも、その子の状態や欲求を敏感に察知してくれる、実に繊細な耳を持つ母親との一体となった時期を、その人生の第一歩として過ごすのである。

このような、母親との繊細なやりとりの中で成長してきた子ども達に、初めて意図的に音楽教育を行なうのが、殆どの場合、幼児教育者である。とすると、これは畢竟、幼児教育者を養成する側が、音楽

教育についてどのような視点を持ち、具体的にはどのような指導を行なっているかが、特に関係者の間で常にとらえ直されていなければならない、重要な問題であるということなのだ。

日本の音楽教育について考えてみると、学校での授業にせよ個人レベルのお稽古事にせよ、すぐ頭に浮かぶのは「ピアノ」或いはその代用品としての「オルガン」である。そして、教員養成課程においても、多くの場合、音楽の授業の中で「ピアノ」に置かれた比重は大きい。確かに「ピアノ」は、一度に沢山の音が出せるという点で便利な楽器ではあるし、私自身、「ピアノ」の演奏活動を続けさせていただいている立場から、「ピアノ」そのものを否定するつもりは毛頭ない。ただ、恰も「ピアノ」が弾かなければ音楽教育が成り立たない、またそれ故に、「ピアノ」の演奏技術の向上が「音楽性」の向上とイコールであるかのように、そして学生達を横

一線に並べて、ヨイ・ドンとばかりに為される音楽の授業があるとしたら、これは既に憂慮される等という事態を越えていると思うのである。

今ここで、音楽の本質について、音楽美学的な側面から言及するつもりはない。しかし、教育の中で「音楽」が果たし得る役割があるとするなら、それは競争原理が横行するこの社会や学校にあって、音楽においては、人は本来の自分自身を取り戻すことができる、そしてまた、自分とは違った他者と、音楽を共有することによって共存し得ることを、実感することなのではないだろうか。

では、どのような方法でなら、具体的にそれが実現できるのだろうか。次に、昨年から私が児童学科の授業の中で、試行錯誤をくり返しながら行なっている、ひとつの試みについて、御報告させていただくことにする。

この授業は、本来ピアノを扱う楽器の時間である

にもかかわらず、楽器も楽譜も何もない状態から始まった。これは、先ず初めに、そこに集まった人間の存在、即ち人格を、この授業の基本として考えたからである。何故なら、この授業でこれから生み出される音が、それぞれの人格と結びついたものであってほしい、逆に言えば、その音が、その人そのものを表しているものであってほしいからである。

さて、日常生活において我々は、一体どれだけの音に囲まれているのだろうか。手始めに、キャンパスの中で、それらの音を意識して聴くことを試みた。初めは、あまり聞き分けられなかった学生達も、時間の経過とともに、少しずつ聞き分けられる音の数が増し、結果的に数十の音が確認された。

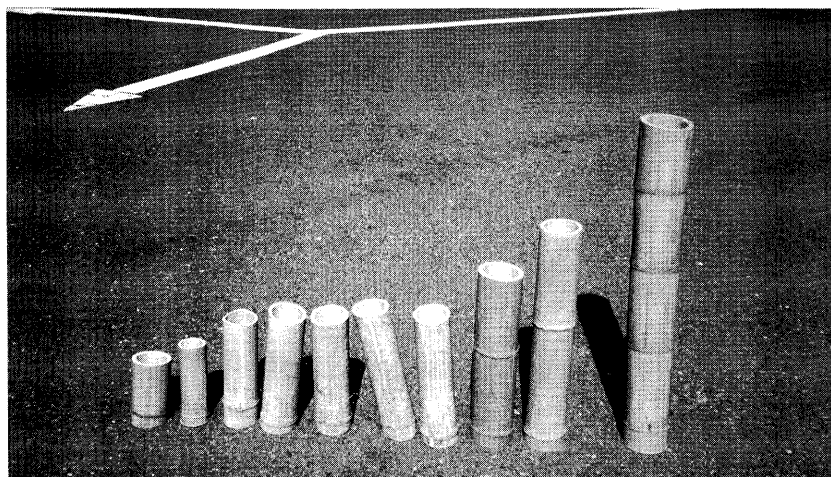
渡辺護氏はこのような音を、(1)日常音(音そのものに意味はなく、例えば何かが動いた時、それに伴って発せられる音)、(2)語音(概念的内容を示す声音や信号音)、(3)音楽音の三種類に分けている。⁽¹⁾

我々も、それに倣って、確認された数十の音を分け

てみた。そして、特に「音楽音」が、単なる音響学的な楽音とは違い、音楽の中で音楽的意味を持って鳴っているものであることを認識した。それは、音楽音と音響学的楽音とが、たとえ物理学的にみて同じ音であったとしても、この授業が、音響学的な楽音としてしか音を扱えないとしたら、これはもう音楽の授業とは言えなくなってしまうからである。

次に、ではどうやって、自分の音を生み出すかを皆で考えた。そして、ただ闇雲に音の出る物を探してくるのではなく、自分の音を、まだ音のない段階から手づくりで生み出すことにした。ただ、あまり難しい作業はできないこと、さらに、できた物が楽器として、またその後の加工にも耐え得るものとして、先ずは素材として竹を選んだ。

幸いにして近くに竹林があり、まずは皆でそこに行き、静かに竹が風によよ音を聴いた。これは、学生達に繊細な音を聞き分ける耳を持ってほしいと



▲写真1 皆でつくった竹筒の楽器の一部
右の3本は下の節だけ残して上の節は抜いてある

いうことと同時に、必要があつての事ではあるが、命ある竹を伐り倒した我々が、それを使って自分の、或いは自分達の音を生み出す事は、伐り倒した竹の命をも蘇らせるのだということを、それぞれの感覚で受け止めてほしかったからでもある。

さて、この竹を使って、はじめに写真1のような筒の楽器を作った。これは半分に割るとコップのような形であり、底を地面或いは硬い物に打ちつけると、筒の長さに応じた音程の良い音がする。皆それぞれ、自分なりに納得できる音のものを、まずは作ったのである。

次に、この竹筒のみを使って、即興的なアンサンブルを行なった。このアンサンブルを行なうにあたって打ち合わせたことは、お互いに良く聴き合い、気持ちを押し量りながら、それぞれ自分なりのリズムで呼びかけ合い、応答し、発展させる事だけで、曲の始まりや終わり、また強弱等については、その場の皆の雰囲気の中で全く自由にやってみた。

はじめは、遠慮がちだった学生達も、次第に、心
或いは体の中からリズムが湧き出てくるようで、さ
らにはそれが拍子へと発展し、結果として、リズム
の大合奏になった。何回かやっているうちに、慣れ
てきたことと、お互いの個性を徐々に理解し合っ
てきて、即興的アンサンブルではあっても、同じメン
バーで合奏している限り、少しずつまとまりが感じ
られるようになってきた。

この段階で学生達は、それぞれ自分なりの感じ方
で、アンサンブルに加えるための新しい音を欲する
ようになった。これに従って、竹筒については、
もっと音程の異なったもの、また竹を打ち鳴らすよ
うなもの、そして写真2のような笛もつくられるよ
うになった。そして、笛のみの即興的アンサンブ
ル、また、様々な楽器を使ったものも行なわれるよ
うになった。学生の数も、いつの間にか他学部の特
講生も含めて、授業を始めた当初の倍以上に脹れ上
がっていた。



▲写真2 皆でつくった笛の一部



▲写真3 いつもの授業風景

夏が近付いた頃、四国でやはり手づくり楽器を主体にした音楽教室を開いている、私の友人から連絡があった。彼の音楽教室では、手づくりの弦楽器を主体としたアンサンブルを行なっているのだが、そこに十四歳の軽い自閉症の少年が通っている。彼によれば、その少年I君は、弦楽器ではとても合奏には入れず、打楽器ならばなんとか叩けるので、我々の即興的アンサンブルにI君を加えて、彼が主催するコンサートに出演しないか、との事であった。

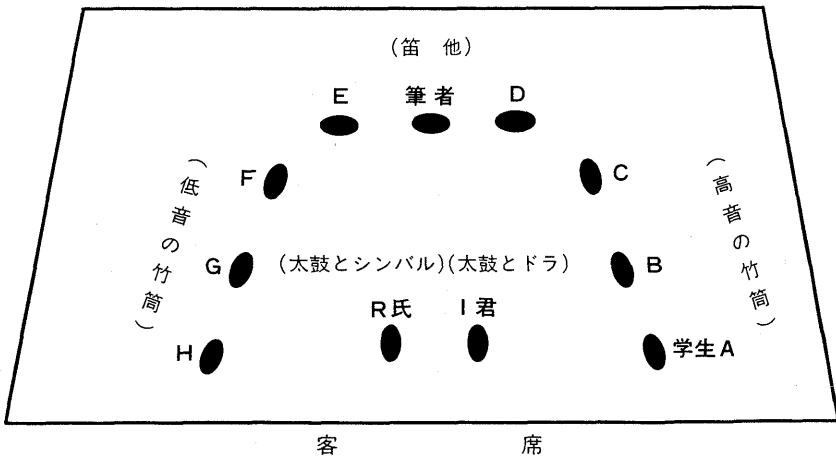
七月中旬過ぎ、合宿を兼ねて八人の学生と、四国へ渡った。コンサートの三日前である。

アンサンブルのメンバーは、I君、我々より二日前に到着してI君とリズム遊びをして過ごしていたプロの打楽器奏者R氏、八人の学生と私の十一名である。自分達でつくった楽器は全て持って行く等、万全を期した。しかし、I君との意思の疎通を得る為に、三日という期間は余りに短すぎた。I君の太

鼓を叩くリズムは、全く彼独自のものであった。それは、リズムに対する応答と言うよりも、アンサンブルとしてまとまりかけたリズムを、突き崩す役割を演じていた。

演奏は、下図のような体制でやることにした。演奏の内容については、可能ならば、曲の中に笛のみのアンサンブルを挟むこと、I君がドラを鳴らした時、この曲は終わるということだけを決めた。

さて当日、固唾を吞む五百人の聴衆の前で、演奏が始まった。普段と殆どかわらないように見えるI君、第三者から見ての成功、不成功はともかく、このアンサンブルを楽しもうと考えているR氏、不安顔の学生達、そして私の十一人の、それぞれの思いを乗せた音が、お互いの間を行き交う。それぞれが、竹筒や他の打楽器で自分のリズムを叩き、応答しながら、次第に笛担当の三人による合奏に移り、それに再び、竹筒や他の打楽器が加わり、自然に四拍子が生まれてきた。ここで、面白いことが起きた



▲コンサートでの演奏者の配置

のである。

練習では、学生達のリズムとI君のリズムが、ま
とまりと崩壊の二極を示していたのだが、この時、
R氏以外に、学生の中からも、I君のリズムに対す
る応答が出てきたのだ。そして、合奏の中に、拍子
でまとまろうとする力と、I君から発せられる、意
表を突くようなリズムでの投げかけに応答しようと
する、二つの力が、大きなテンションを生み出し始
めた。さらに、この二つの力が、テンションを孕み
ながら歩み寄りを見せ始めた。I君のリズムに応答
しながら、その中に拍子を見出し発展させる、する
とまた、I君からの投げかけがあるということが、
何回か繰り返された後、たいへんな盛り上がりにな
った。そして、皆が渾身の力を振り絞るようにし
て、もうこれ以上続けるのは精神的にも体力的にも
限界となった、まさにその瞬間、このアンサンブル
に表現された、十一人のメンバーの全ての思いを受
け止めたとしか言いようのない、見事なドラが、一

発、鳴った。I君がドラを鳴らした瞬間から、その
音が消えるまで、ホール全体が、身しろぎ一つ、息
一つできないほどの張り詰めた空気に包まれた。音
が消えた後、やっと、我々を含めた会場中の人間
が、息をつくことができた。万雷の拍手をいただ
き、大成功だった。しかし、この時我々が経験し得
たものは、大成功か否かということとはもっと別の
ところにあった。

それは言葉による意志の疎通が難しいI君をも加
えた、性格も年齢も異なった十一人の人間が、この
ような仕方の中で、自分自身のリズムを持ちなが
ら、お互いの存在と違いを認め合い、そのうえで共
感し合い高め合い、共存し得る、心の接点を見出せ
る実感とでも言えるだろうか。

現在も、この授業は、試行錯誤を繰り返しながら
続いている。
(聖学院大学)

註(1) 渡辺護『音楽美の構造』(昭和四十四年、音楽
之友社)六十三―八十一頁。

トポスにおける発達

第 6 回

—保育における一回性と普遍性—

無 藤 隆

トポスを考えるとは、特定の時間空間のあり方にこだわって、その固有性を組み入れていくことであり、さらに、そこに関与する物・人の具体的あり方を考慮することである。それはまた、主体としての人が身体を持って空間内に根付き、対象に関わっていることに改めて向き合うことでもある。幼児を対象とする保育がそのような意味でのトポスを濃厚に持っているという主張が本連載の主眼となることである。この考え方は、いわゆる臨床的なアプローチに対して示唆する部分があると考えられる。本稿ではその意味を、現象が一回切りのこととして生ずるという最も基本にある性質にまで遡ることで論じたい。

臨床的アプローチとは何か

臨床心理学では、臨床とはいわゆる心理臨床を指し、カウンセリングなどの実践を念頭に置いて使われる用語であろう。また、臨床心理士等の訓練を経た人の専門的な営みであると見なされる。だが、保育や教育の問題に

当てはめたときに、臨床の概念はトポスの概念と密接に絡んだものなのである（中村雄二郎「臨床の知とは何か」岩波書店、一九九二）。そもそも、医学で臨床という場合には、ベッドサイドの意味であり、病人を直接に治療することであり、またその治療を専門的に行いつつ、治療から専門的な知見を得ることとしてとらえられている。同様に、臨床を保育・教育に当てはめたときに、いわゆる「病」や問題行動についてどう対処するかを中心に行っていることが多いが、しかし、本来、保育が一人一人の子どもの成長を問題にしていることを考えれば、その行為そのものが既に臨床的なのである。つまり、特定の子どもの成長可能性を現実のものにすること、また、専門的な立場から対処しようとする事、その対処から専門的な知見を増そうとすること、などの特徴を保育は持っているからである。

「保育臨床」については、大場幸夫・前原寛（両者

編「保育心理学、ⅠⅡ」東京書籍、一九九五）初め何人かがその考え方を進めているが、まだまとまった見解として成り立っているわけではない。それらの考えを参考にしながら、私の立場からは、臨床的であることを四つの面に集約できる。

1 当事者性

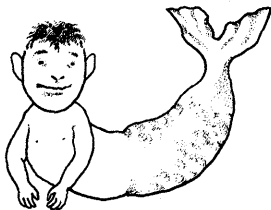
その活動の当事者の視点で語るのか、当事者かいかなる形でその事態を眺め関わっているかが問題である。だが、それは、当事者の言葉をそのまま信じ、それに基づくべきだということではない。当然だが、当事者と言えどもすべてを言語化できるわけではない。さらに、その場を離れて思い出すということをするのであれば、そこに脱落や歪みが入る。当事者の言うことを大事にすべきだが、それがすなわち当事者の視点ではないのである。

もう一つ保育にとって重要なことがある。それは

当事者として子どもを含めねばならないということである。そして、幼児のような小さい年齢であれば、その言うことに耳を傾けるといっても限界が大きい。当事者の視点を子どもを通して構築していかねばならないのである。それは、子どもの視点に共感的に立つことよって行われよう。その共感、場・トポスを共有する人間にある程度可能なことである。厳密に言えば、誰にも分からないことであるがしかし、その場での子どものすることをていねいに追いかけることで浮き彫りになってくることがあるだろう。

視点から見直すとは、その子どもなり保育者なりの気持ちになることではあるが、それは誰にも完全には可能でない。保育者自身にすら自分の行為について後から考えて分からないことはいくらでもあるだろう。だが、その場にいることはそうでない場合よりはるかに事態に近いのは当然だ。また、その場

を観察することで見えてくることもある。観察とは行動の記録機械に徹するのでない限り、共感を伴わざるを得ないからだし、共感をともなわせつつ理解しようとするれば、当事者の視点に近づく。トポスという視点は、同じ活動の場にいることが可能にする共感性をすべての基本に置くのである。だから、その共感を深めるには、十分にその場に馴染んで場の特性をわきまえていなければならぬし、たとえ観察的な立場からいせよ、自分が行為した際の記憶や感じ



方を思い起こしつつとらえるのでなければならぬ。
い。

2 援助性

臨床的であるとは、当然のことながら、相手を助けることである。だから、問題を抱えた人への援助に対しての示唆を与えることが臨床的なアプローチに立つ研究や論議に不可欠である。広い意味で示唆を与えるというのであれば、ほとんどの研究がある意味で示唆的である。幼児なり保育なりを何らかの意味で扱っていれば参考資料になりうる。その逆に、特定の子どもなり保育者なりに直に役立つ知見を求めてもそれはおそらく研究の域を越えている。研究という形の議論は特定個別の関係から離れての一般性を目指すのであろうから、そして、そう目指すのでない限り、その保育者以外は関心を持たないだろうから、そこまでの有効性を求めるのは無理が

ある。その中間に、漠然とした子どもや保育の理解を越えて、保育で問題になるようなことについての具体性を持った議論が来るはずである。そして、それが何かの有効性を持つには、保育という場、そしてその場における子どもや保育者のあり方を十分に考慮に入れたものでなければならぬ。

子どもなり保育者について何かの発見があるとして、トポスのな性質を持つ保育といった現象については、その発見をそのまま適用することは困難である。いかなるトポスにあるかによってその発見された一般性を持つはずのことが変容されざるを得ないからである。どういう環境にあるのか、どういう物や人に囲まれているのか、それとどのような関わりを行うのかによって、子どもや保育者の振る舞いは大きく変わってくる。

仮に子どもの内的な能力といったかなり安定しているはずのことについての発見であれば、トポスの

な変更をおそらくあまり受けないだろうから、多くの場において適用可能な知見になるのではないか、という反論があるかもしれない。だが、そういった場に応じた変更を示さないような知見は、保育という援助の行為において使い道が乏しくならざるを得ない。物・人・関わりに応じての違いを見せうるからこそ、その違いが問題になる働きかけに活用可能なのである。そしてまた、その働きかけに応じて子どもの変更をとらえるための基準になりうるのである。だから、援助的に働きうる知見とは、行動的外的な側面を含み込んでいなければならないことになろう。

だがまた、援助に役立つ知見とは、多くの場合に、マニュアルといった明瞭で「こういうときにこうする」という具体的な行動への指示を持ったものにもなり得ない。様々なトポスのな変更に応じていくとは、行動指示的な知見では無理だからである。

場合によって相手によって変わるのだということを含めての議論でなければならない。だとすれば、その援助に働く知見とはたかだか参考資料に過ぎないのであり、それを生かすのは現場に働いている専門家の創造的な智慧に他ならない。マニュアルを適用するだけの専門性は保育では成り立ち得ないのである。その意味では、いかなる知見も現場でそのまま役立つことはありえない。だが、創造的な力を持った保育者であれば、参考にしうる知見は、その保育者の力量や見通しに応じて存在することも確かである。

3 行為者性

当事者の視点ということを述べた。しかし、その場を離れての当事者の意見が必ずしも当の場での活動での様子を確かに表しているのではない。それは、当事者の現場を離れての「語り」であって、既

に述べたように、様々な歪みを含む。記憶に頼るほかに、「こう語るものだ」という文化やその人の受けた教育訓練からの言い方を利用してゐるからである。だとすれば、まさに当の活動をしてゐる最中の様子をとらえなければならぬはずである。トボスという観点からは、その場における心身の関わりを当事者の行為と見なすのであるから、その行為的関係そのものをとらえる必要がある。具体的に活動を行つてゐる最中の行為に即して、何を行つてゐるのかを述べることにより、行為者が押さえられる。

その行為をとらえるとは、外から見て適当なカテゴリーで分類すればよいというものではない。そのカテゴリー自体がその場で実質的に働いてゐるかの検討が必要である。その上、カテゴリーと行為との対応は通常の心理学の研究においては決して高くない。観察者の間で的一致率は九割を越えることは少ない。また、仮に一致したとしても、それが具体的

に何を指しているのかは判然としない。一致するとは何かの行動に同じように注目し、同じ種類の分類を行つてゐることは保証しても、その注目してゐる行動が実際には何を表してゐるのかを明らかにするとは限らない。その場における実際の行為について詳しく語るのであれば、そこで起こつてゐることと迫ることはできない。

もちろん、いかに語ろうとも、それは語る人の持つてゐる日本文化なり研究者文化なりに依存した語りであつて、その場に生きたものであるという保証は誰にもできない。仮に当事者である保育者がその語りに賛成しようともそうなのである。賛成してもらえれば、反対されるより、事実に近いことは確かであるが、事実そのものではない。事実と反する可能性も含んでゐる。誰の語りでもその可能性は常にある。問題はいかに事実接近していくかである。どの語りが事実により近いかを判定することは

厳密にはできない。ただ、具体的な物そして人の身体的動きを丁寧に見れば見るほど、その語り口・言い回しが、十全の保証はないにせよ、現実が起こっていることに近いと見なしてもよからう。額面通りの事実として受け取るのではなく、また解釈と離れた語りがあるとするのではなく、だが、事実に近い可能性が高いだろうと互いに了解できる当事者の動きの語りは行える。

それは、要するに、できる限り「普通の」言葉で詳しく語ることに尽きる。必要に応じてどの面を切りとるかは変わってくるから、それで完全だというものはないにせよ、もっと詳しくいつでも語れることが重要だ。あるいは特定の活動についての記述はその際の記録が限られることで決まってくるにせよ、もっと詳しく語る必要が出れば、次の機会にはもっと記述を詳細に展開できることが成り立つことが肝心なのである。そこから、行為者のあり方につ

いての記述が可能になり、その記述において、臨床的な関わりの姿が描き出せるのである。

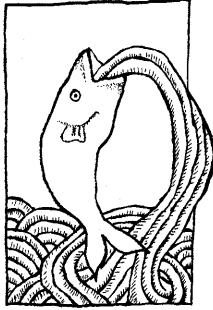
4 一回性

あらゆる活動・行為は一回切りのこととして生じる。同じ場、同じ子ども、同じ保育者、同じ種類の活動であっても、そこに同じ関わりが必ず生じるのではない。絶えず人は変化し、子どもは成長し、場の条件が変わっている。偶然生じる出来事も数知れずある。臨床性は常にその出会いの新鮮さに直面せざるを得ない。だとしたら、これまでの知見はいかに役立つのか。単純に応用可能であることはありえない。新たな出会いを日々可能にし、支える知見とは何かが問われねばならない。

トポスとは、ある特定の空間の静的な構造を言っているのではない。そういう面はあるにせよ、トポス自体が時間的な変貌を含み込んで成り立つダイナ

ミックな関係である。むしろ、動的な行為の連鎖が絶えず生じつつ次のものを生成することにおいてトポスが成り立っている。

臨床的であるとは当事者の創造的なあり方を伴うが、それはさらに一回の出会いでの新しさに参与す



ることである。だが、同時に、その出会いは当事者のそれまでの経験や専門的な知見を踏まえての出会いであり、創造である。一回限りの出会いを記述し分析するのと同様である。一回限りとしての出来事の連鎖を語るのだが、その語り方は普遍的な言葉での言い方によらざるを得ない。その上、そこから、何らかの一般的普遍的な知見を引き出すのである。

一回性とは物事の本来的なあり方である。それを語り、普遍化することは、一種のたとえに過ぎない。実在することは、その一回限りの事実である。事実とは特定の時間・空間における物・人の出会いである。それ以外のことはそこから抽出であり、その限りにおいて確かなものから離れたたとえ話であろう。その場での動きが連なって、活動をなし、その活動が逆にあるトポスを定義していく。その連鎖を可能にするまわりのものが環境としてトポスの

周辺部になる。その意味では、個人の内面もまた実は環境に属する。実際に「ある」のは、動きとして絶えず生成されている過程なのである。だから、一人の子ども（保育者）の個性が一貫して状況を越えて存在していると思うのも、一回性を越えてのある種の普遍性をたとえ話により語っていることである。

確かに子どもの個性を知り、長い目でその子どもの成長の姿を知ることが、保育の基本である。だがまた、その個性が固定され、その場での新たな出会いを見えなくさせ、あるいは失わせてはならないはずだろう。出会いとはそこで偶然を含め常に新しいことが起こることである。そして、新しいことが起こるから、関係に変貌が起こり、それを我々はトポスにおける発達と呼ぶのである。

臨床的なアプローチあるいはトポスの観点からのアプローチにより、保育を記述し研究するとするな

らば、このような意味での一回性を引き受けざるを得ない。それは、まさにあるときに生じたことをできる限り丁寧に述べて、そこから考えられることを、その記述を詳しく語ることを通して論じることには他ならない。その論は、あるいは他の事態にも当てはまることを生み出すかもしれない。あくまで、実在するのは一回限りのことであり、絶えずそこに戻るべきなのである。

一回性の出来事において、当事者の視点からその活動の最中での行為・動きを語ること、そこから保育研究は出発すべきであるし、臨床的援助の可能性は生まれる。トポスにおける発達論とはその可能性の探索のことなのである。

（お茶の水女子大学）

ある日の育児日記から

(62)

佐藤 和代

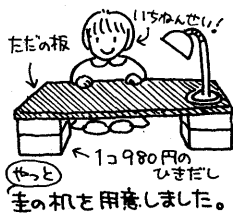


朝食を食べながら、夢の話が出ることがあります。「有ね、きのうの夢、おもしろかった」「そう、どんなの?」「お母さん、知ってるでしょ」「えー、有の夢だから、知らないよ」「知ってるよ、お母さんもいたもん」こういう話、大人は何だか頭がぐらぐらしそう。でも圭と有なら会話が成り立ったりします。「圭、きのう海の夢みた。泳いでたら魚がいて、有もはいってきて」「あっそうだよ、有もぎぶーんって、泳いだんだよね」「そうそう、おもしろかったねー」

まったく何のこっちゃ、と思いつつ、こういう

のは楽しい。
でもいつも平和な会話とは限りません。テレビを見ていた有が「あ、ここ行ったね」圭は「うそー、外国よ」「だって行ったもん」「どうやって?」「ひこうき」「うそっ」…有にとっては夢も現実も空想もそんなに違いはないけれど、常識を身につけ始めた圭には、ときとしてそれが許せないらしい。別にうそじゃないの、と説明してみるけれど、納得させるのは難しく、困ったものです。

困ったといえば、この頃有が唐突に発する質問も困る。「ねえ、これ、夢?」
…うーん、有くん、それはね、お母さんにとってよくわからないことなのよ。



ルンルンのゆりかご

松井 とし



うさぎのルンルンは、四か月の間に相次いで三度のお産をした。

一度目は、地盤沈下のために職員室の下にできた穴の中で、子どもを産んでいた。私は産室を用意していたのだが、一向に産む気配がないので、何かの間違いだたと諦めていた。ところが、一か月後にかわいい子うさぎがちよろちよろと穴から出てきたのだった。

しばらくすると、またルンルンはしばしば穴の中へ入って行く。布切れをくわえて運んだりするようすがどうもおかしい。雄のピーターと小屋を別にしていたので、まさか二度目のお産が始まるうとしているとは思わなかった。それから一か月たったある日、横穴からそっとのぞくと奥の穴の入り口あたりに何かが見える。目を凝らすとそれは、耳をピンと立て、後ろ足で立っている白い小さなうさぎの姿だった。暗い中に赤い目が光り、まるで蠟燭がともっているかのように思えた。やっぱり生まれていた。

その後半月ぐらゐると、ルンルンとピーターと一緒に外へ出てしまふ事件が起こつた。園庭のルンルンとピーターは仲よく寄りそっている。「もしかしたら……二度あることは三度ある」、そんな思いが頭をよぎつた。

「小屋の中に産室を作つたら、ルンルンは受け入れてくれるだろうか」。私は入口だけに小さな穴を開けたダンボールの箱を小屋の隅に固定し、細く裂いたペーパータオルや藁をおいた。早速ルンルンは中に入った。「今度はここで赤ちゃん産んでね。どう、気にいった？」等と話しかけると、まんざらでもなさそうだった。

産室を作つてから数日後、思つたとおりルンルンにお産の兆候がみえた。私は何とか産室の中を見てみたいと思つた。

ある日、ルンルンが散歩に出たすきに、小屋の中にそつと鏡を入れた。すると、そこにはボールのようなものが映し出された。よく見るとそれはルンルンが胸の毛をぬいて作った「ゆりかご」だった。白い毛とペーパータオルが絡み合つて見事にボール状に作られている。驚き、感激もしたが、見てはいけないルンルンの秘密を見てしまったような後ろめたさを感じ、あわてて鏡を引き出した。

「この中に小さな赤ちゃんがいる」、畏敬の念を感じたルンルンの「ゆりかご」だった。

(元幼稚園教諭)

特色ある園経営

原口 純子

はじめに

昨今、年度当初の県の教育方針指導説明会に出席してみると、「特色ある園経営」とか、「創意ある園経営」が強く求められています。

急速な社会の変貌と価値観の多様化の中で、幼稚園の経営が、旧態依然としてはいないだろうか。いつまでも、折り紙保育にたよったり、空き箱や廃材

のありきたりの、粗雑な環境で、充実感のない鈍感な保育を平気で続けているような実態はないだろうか、との反省に立っているのかもしれない。

教育要領が変わって、環境を通して行う遊びを中心にした保育がなされるようになって、どの園ものっぺらぼうのように特色がなくなり、同じようになってしまったのはなぜなのでしょう。

一つには、幼児の興味や好きなものを遊びのベ-

スに取り入れることから、誰もが共通のイメージを持てるテレビのアニメーションの影響は大きく、全国津々浦々どの園に行っても、同じような格好をし、同じような遊びが展開されるということが考えられます。

しかし、いかにテレビの影響が大きいといっても、それを園として、どのように考えるかは、園の姿勢であり、方針とかわわってくることです。幼児がセーラームーンが好きだからCDを買って振り付けを考えて一緒に踊るか、幼児はそれを好んでいるけれども、園としては異なる音楽を選ぶかは園の主体性にかかわることです。

保育雑誌の役割もそれなりに大きいものはありますが、あまりに素直にアイデアをそのままに、受け入れてしまう等もあるかもしれません。

どの園も似たような遊び、同じような環境の設定、特色のない園経営は、「幼児をこう育てたい」

とか「このような生活や経験を持たせたい」という保育理念や、保育イメージの希薄さによるのかもされません。

公立幼稚園離れ

私の幼稚園のある地域には公立私立の様々な特色のある幼児教育施設があります。例えば、天気さえよければバスで市内の様々な公園に出かけ、野外遊びを中心にした保育施設、モンテッソリーの保育をする教室、行儀や文字指導、長時間保育、送迎バスを特色とする園などです。

かつて、市が村であった昭和五十年代は学区の就園該当年齢の六、七十パーセント以上が公立の幼稚園に入っていたのですが、さまざまな幼児教育施設ができて、現在の園は四十五パーセント程度に落ちています。母親の就労など社会的変化で、保育所が伸びていることや三歳児保育のある私立に流れてい

ることもありますが、公立の園経営も問われていま
す。

日本経済が高度成長をとげている時代は、バス、
給食、長時間保育が幼稚園の三種の神器といわれ、
忙しく働く母親に便利な条件を持つことが、幼稚園
経営の要とされました。しかし、バブルははじけ、
子どもの数が減って、女性の生き方についての、価
値観の変化などにより、ただ安くて便利では満足せ
ず、より個性的な我が子の教育への思い入れが感じ
られます。

事実、特色のあるA園は、独自の主張のある幼児
教育施設です。給食もなく、辺ぴな場所にあるにも
かかわらず、送迎バスもありません。その上親がヘ
ルパーとして保育に参加することが求められている
ようなところですよ。けれども教育の主旨に賛同すれ
ば、遠くても、お金がかかっても、親が良いと思っ
た教育をうけさせたい、ということがわかります。我

が子の教育にかける親の気持ちが変わります。

特色ある幼稚園とは

幼稚園における特色にはどのようなものがあるで
しょうか。

1 施設設備に特長をもつ

- ・ アスレチックや大型の園庭遊具がある
- ・ ヤギやウサギなどの飼育動物がいる
- ・ 園舎がオーブンスペースになっている
- ・ 園庭に林や小山や流れがある
- ・ 温水プールの設備をもっている

2 保育の考えかたに特長をもつ

- ・ 遊びを中心に環境を通して行う保育をしている
- ・ 特色ある教育思想を基盤にしている（モンテッ
ソリー、シュタイナー等）
- ・ 野外遊びを中心に自然体験を重視している

- ・創立の基盤が宗教である（教会、お寺）
- ・障害を持つ幼児との統合保育を行っている
- ・独特のリズム遊びや絵画の指導をしている
- ・文字や数のワークを重視している
- ・鼓笛隊の指導に力を入れている

3 経営の重点を親の希望に添わせている

- ・長時間保育、給食、バスを運行している
- ・小学校受験に合わせた指導をしている
- ・制服に特に力を入れ、かわいらしくしている
- ・運動会や発表会を公園や大きな施設で行っている

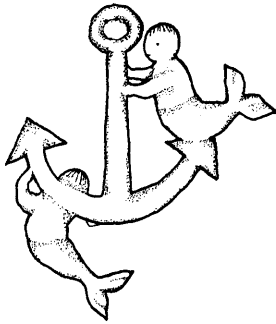
4 地域社会やPTA活動の特色

- ・卒業生を中心に地域社会に後援会組織をもつ
- ・PTA活動や家庭教育学級の運営に特色がある

5 その他

幼児教育に沢山の選択肢があり、親が我が子にふ

さわしい教育の場を選べることは望ましいことな
だと思いますが、沢山の選択肢があることはまた、
親を悩ませることにもなり、幼稚園の入園願書を出
す季節に「幼稚園一〇番」が開設され、幼稚園に
ついての様々な疑問や相談にのっています。（平成
七年十月八日朝日新聞）



園の特色が経営のためではなく、真に幼児のためであることを願ってやみません。

公立幼稚園における特色ある経営とは

私立の幼児教育施設は、それぞれの考え方によって特色ある独自の方針を出し、施設設備を整えて、それに賛同する人が入園します。それでは、公立幼稚園における特色ある園経営とは何でしょうか。

公立幼稚園の特色は経費が税金で賄われており、片寄りのない公教育を行うところにあります。即ち文部省の示す学校教育法や幼稚園教育要領にのっとった教育です。この遊びを中心にした、環境を通して行う教育が成果をあげ、一人一人の幼児が、個性豊かに、年齢にふさわしい成長を支えることができる、それこそが、公立幼稚園の特色なのです。

経営のために妥協することなく、本来の幼児教育のあるべき姿を追い求めることができるのです。し

かし、それでは何故、公立離れが起きるのでしょうか。公立が安くても、給食があっても、送迎バスもあるにもかかわらず尚、遠くの私立を求めて行くのはなぜでしょう。公立の幼稚園の教育内容や運営に魅力を感じないからに他なりません。

環境を通して行う教育で幼児はちゃんと育っているでしょうか。幼児教育のむずかしさはその評価の困難さにもあります。算数の一桁の足し算が理解できたかは、テストで理解度を知ることがある程度できます。しかし、幼児の心の成長を計るスケールはないのです。勢い「のびのび」とか「生き生き」とか、「幼児の輪郭がスッキリしている」とか、「ちゃんと」といふあいまいな感覚的なとらえかたで物事がすすめられていくことになるのです。従って、園はちゃんと成長していると思っていなくても、保護者にはちゃんと育っているとは思えないということにもなるのです。

教育要領は明日の日本を担う子どもを育てるのにふさわしいものですが、大綱が決まっているだけで、具体的にどういふ内容を持たせるかは現場にまかされています。もとよりそれはとても大切な事であり、ありがたいことなのですが、個々の現場がその重責を果たしているかどうか問題はあるのです。

教材研究の大切さ

環境を通して行う教育という時、教師こそ最大の環境であるといくら強調しても、日本人の「環境」という言葉についての感覚は物的、静的なイメージを持ちがちです。幼稚園で言えば、ブランコ、砂場、積み木、ままごとコーナーなどです。物が目立って幼児の影が薄い感じがします。意味合いは違っているかもしれませんが、「自由保育」という言葉には、いかにも幼児が好きな遊びを

好きな場所で、ワイワイと遊んでいる感じがあったように思います。

環境を通して行う教育は、物に保育をまかせて、教師が見回りをしているようなイメージがなかなかぬぐえないのです。乏しい環境では栄養が悪くて十分育たないことは自明のことです。この栄養不足が「環境を通して行う教育」の園に蔓延しているのではないでしょうか。

一般に公立の幼稚園は教育課程も指導計画も表紙のついた立派なものが各園にできているのです。これが全うに運営されていけば、幼児はすくすく成長して、「明るい子ども」や「思いやりのある子ども」や「意欲ある子ども」



も」などが小学校に入学することになってきているのですが現実にはどうでしょうか。

成長を保証できる保育の内容が必要なのです。そのためには、今こそ決め細かな教材研究が必要であると思います。物を作る経験で言えば、漠然と物（例えばおりがみや空き箱廃材等）を投げ掛けるというのではなく、経験させたい内容に合わせて、きめ細かな教材の準備をすることです。

言葉の経験を充実させるには、行き当たりばったりの紙芝居やマンネリ化した手遊び等をなんの意図もなく繰り返すのではなく、二年間を見通して、四歳の一学期にどのような言葉の経験をさせるかについての教材の研究と準備が欲しいのです。それらが、時に応じて場にふさわしく言葉遊びやわらべうたとして活用できれば、幼児の言語経験は豊かなものとなりましょう。

成長に必要な、確かな経験をもてる環境を整える

ことにより、その幼児なりに経験できるようにすることです。

それには園長や主任のリードと保育者の保育への情熱が必要なのです。園内研修や外部の講習会への参加、教材を日々準備できる時間が必要です。

創意ある園経営

今日私たちがめざす教育は、文字が書けるようになるとか、〇〇ができるようになるというものではありません。目に見えない心の経験を通して、いわゆる心情、意欲、態度の成長を願っているのです。

この保育の意味を保護者に伝えるために、園長講話や園だより、クラスだよりの発行、保育参観、懇談等を行います。保護者にとって大切なのは、我が子の日々であり、我が子の心情、意欲、態度が成長しているという実感なのです。

〇幼稚園の園長先生は保育者が日々の生活の中

で、その幼児の成長の感じられたエピソードの一言メモを保護者に渡すことにしました。毎月どの幼児にも行きわたるように注意をはらいます。例えば

「今日、M子さんが、泣いていたY子さんにどうしたのと声をかけて自分のハンカチをさしだしてました」というようなものです。生活の中に消えてしまふあぶくのようなエピソードもすくい上げて日差しにあてれば、それは母親にも幼児にもダイヤモンドの輝きをもつものとなりましょう。「牛乳が初めて飲めました」「砂場でA君と友達になって一日一緒にすごしました」など、どんなに些細なことでも、母親にとって我が子の成長こそなによりの喜びであり、願ってやまないものです。

筆者は幼児の成長エピソードを学期毎に写真と共にカードにして保護者に渡していましたが、体裁は整わなくてもリアルタイムで伝えられる日々のメモ方式の方が良いように思います。

むすび

創意ある園経営も、特色ある園経営も、珍しい施設や借り物の保育思想などを持ち込むことではないと思います。それは、ひとりひとりの幼児が豊かな経験と確かな成長をとげられるようにとの思いを思考の軸に置くというごくありふれたことになりました。教育課程の組みかた、保育室のおもちゃの選定や設備、園庭をどう使うか、家庭との連携として、幼児の成長の姿を父母にどのように伝えるか、様々な行事のもちかたなど、どれ一つを取っても改善の余地のあるものばかりです。そして何より、クラスを持つ保育者が確かな保育力をもてるように、園として努力することが大切なことと思います。

(茨城県公立幼稚園)

動物園の愉^{たの}しみ

並木 美砂子

私たちは人間は、遠い昔から動物との深い関係をつくってきました。動物園の歴史も千年以上あります。はじめは支配者の権力の象徴として誕生しました。猛獣や珍しい動物を集めていたのです。そして、それを見ることができたのも、特権階級に限られていました。

いろいろな動物を見やすく展示し、誰にでも楽しんでもらうという、私たちに馴染み深い「動物園」

は、わずか二百年くらい、日本では百年あまりの歴史しかありません。

では、いったい私たちは動物の何に惹かれているのでしょうか。なぜ、動物園に足を運ぶのでしょうか。

豊かなコミュニケーション

子ども動物園に、ようやくカピバラの赤ちゃんが誕生しました。お天気の良い日は家族連れや遠足の

子どもたちで、カピバラ池のまわりは人垣ができるほどです。どんな動物も、やはり赤ちゃんは人の目を楽しませる器量を備えているものです。ちょっとお客さんの様子をカピバラ小屋の中からのぞいてみましょう。

「あかちゃんだって。ママ、あかちゃんだって」

「そうね。あかちゃんね」

「何してるの？ あかちゃんたち」

「何だろうね。遊んでるんじゃない？」

「ほら、こっち向いたよ。こっち来るよ。こっちおいで」

こんなふうに、自分で赤ちゃんがいることに気づいてくれるのは、やはり五、六歳以上の子どもたちのようです。三、四歳の小さな子は、だれか大人が働きかけて、初めてわかる場合が多いようです。

「ほら、見てごらん」

「……」

「あそこ、あそこ。見えるかな。小さなかわいいあ



▲写真1 水あび大好き「カピバラ」

かちゃん」

「どこ？」

「ほうら、ね。〇〇ちゃんとおなじね。いい子、いい子してもらってるよ」

「いい子、いい子？」（自分の頭を自分で撫でる）

「あら、おっぱいたくさんね」（カピバラには、全部で十個も乳首があります）

このように、動物園ならではのほほえましい光景が、動物の親子のまわりには見られるものです。

ですから、動物園の持つ魅力のひとつを、私は「人間どうしのコミュニケーションがはかれること」だと思えます。親子であれ、友達どうしであれ、時には知らない人どうしであっても、動物たちの見せるさまざまなしぐさは、人間どうしの会話をはずませます。

動物園へ足を運べば、きつとどこかで動物の赤ちゃんや親子に出会えるものです。彼らのしぐさは、見に来た人の心を和ませ、コミュニケーション

のきつかけになっているはずです。

また、とくに赤ちゃん動物がいなくても、魅力的な動物はたくさんいます。あたたかな日だまりの中で、半分目を閉じてゆっくり反芻しているヒツジたち。よく見ていると、おなかの方からのどを通って、食べた草のかたまりがぐぐっと口にもどっていくのがわかります。近づくと、草を噛み直している音まで聞こえます。

「かみかみ、してるんだよ」

「ようく、かみかみね。ヒツジさん、えらいね」

「〇〇ちゃんも、じょうずにかみかみできまじゅか？」

時々、赤ちゃんことばも入れながら、おかあさんたちは自分の子どもに話しかけます。そして、よその子どもがヒツジに触れているのを見ると、

「〇〇ちゃんも触ってごらん」と、手をそえて触らせようとします。

「うちの子、イヌでもネコでもへっちゃら。なんで

も触らないと気にいらないうたいで」

「うちの子は、だめなんですよ。だれかと一緒じゃないと」

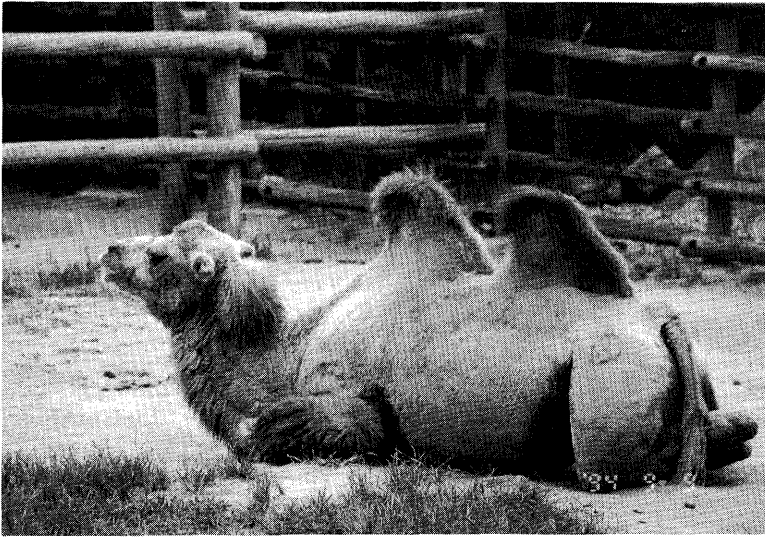
「でも、いったん動物みつけると、そこからなかなか離れないんで、困っちゃうわ」

ほら、こんな風に、知らない親どうしも、動物を
はさんでちょっと仲良しになるのです。

どんな動物園であっても、今、ここにご紹介した
光景は共通であり、そこにこそ、動物園の愉しさの
秘密が隠されていると思うのです。

動物、子ども、先生、そして私たち

さて、最近の動物園では、ウサギやモルモットと
いった小動物を、遠足で来た幼稚園や保育園の幼児
のために準備しているところがよくあります。ある
時間帯、その園のために場所を確保し、動物を用意
するので、その事前のうちあわせもします。うちあ
わせの内容は動物園によっていろいろですが、私た



▲写真2 フタコブラクダはお口もぐもぐ、いつももぐもぐ

ちの子ども動物園の場合、動物の種類や活動内容、

教材（紙芝居や写真）の貸出しなどを予約カードに

記入し、当日の活動の流れを先生がたに理解してもらうことにしています。実際に使う動物に触れても

らい、動物のツメや歯がどうなっているのか、ま

た、どんな接し方が動物と子ども双方に安全かを確かめていただくのです。

「わあ、かわいい。ひさしぶり。ウサギだっこするのは、先生がたも大喜び。

「あ、なるべくおなかを上にもつけないで、自分の方に向けたほうがいいですよ。意外に足の力があるの
で、しっかり、おしりを支えて持ってください。そのほうが動物も安心しますから」

「ええっ。これ（ハツカネズミ）、さわるんですか？ わたし、苦手なの」

「でも、子どもには人気動物ナンバーワンですよ」

「だけど、ほら。しっぽに毛がはえてないでしょ。

気持ち悪くて」

「じゃ、この布に乗せてから、手に乗せてみたらどうでしょう」

「かわいい子たちのためだもの、はい、やってみます」……

若い女の先生がたには、カメやカエル、小さなネズミはあまり人気がありません。でも、使う動物の種類を決める時、子どもたちの反応を教えてあげると、やはりそこはプロ意識があるためでしょう。子どもたちのため」というその一点で、自分も苦手動物に挑戦してくれます。

「いったん、体験するともう大丈夫です。遠足の当日も、私たち係といっしょに、園児たちに動物のことを教えてくれたり、カメを触ってみせてくれたり、本当に一生懸命です。「子どもたちのため」の一言は、先生がたの気持ちを変えてくれる魔法の杖のようなものですね。

動物と、子どもと、先生と、そして私たち動物園の係と。そこには何か「教える者」「教えられる

者」、あるいは「あなたがお客さん」で「私が店番」といった関係はなくなります。動物を仲立ちとした、コミュニケーションの場となります。緊張し切った子ども、走ってウサギを追いかけ回す子ども、もくもくと餌をあげ続ける子ども、じーっとネズミの眼をみつめている子ども。実に個性の現れる場となります。

「へー、○○ちゃんて、意外に動物だめなんだ。いつもははしゃいでるのにね」

「○○ちゃんはやっぱり好きなんだね。園でもいつもチャボ小屋の前にいるもんね」

子どもたちの見せる意外な一面に、先生たちの会話もはずむようです。

無理やりモルモットの口にニンジンを押し込もうとしている園児の姿を見て、

「私たちの給食指導、そのものね、こう、そっとつぶやいた先生もいました。

確かに、子どもがどのように動物とかかわるかは



▲写真3 この布があるとウサギのツメも痛くないもん

その子の内面を微妙に映し出し出してくれる鏡のようなものです。そして、その鏡を磨けるかどうかは、私たち大人の気持ちにかかっているのだと思います。

このごろの「ビデオ」事情

こうして、子どもたちと動物たち、そして私たち大人とのかかわりあいを考えてみて、最近気になることがあります。ハンディなビデオカメラの普及率は年々高くなり、かわいい自分のお子さんの姿を収めるべく、たくさんのお客さんがビデオカメラ片手に動物園を訪れます。

「パパー、これくすぐったいよ」

「ねえ、おてて、なめられちゃったよ」

「どうしてヤギさんのうんち、まるいの？」

「このカメラさん、いつ寝るの？……」

次々にいろいろ話かけてくれるこどもたちの声をよそに、必死にいいアングルでその子を撮ろうとする大人たち。この時、大人はレンズごしに子どもと

接しているのです。

ひどい時は、小さなネズミが手から洋服の間にはいつてしまい、パニックになっている自分の子どもを、「いい場面だから」といって、ビデオを撮り続けていご両親もいます。そのときの子どもの気持ちはどうでしょう。レンズのむこうの大人と、どうやってコミュニケーションができるでしょうか。同じ目線で共通の世界をもつ時に、本当に子どももの気持ちや気分がわかるのではないかな、と思います。

いろいろ思いつくまま筆を走らせました。動物園の周辺には、まだまだたくさん話題がありました。動物園です。せっかくの楽しさいっぱい動物園です。本当に愉^{たの}しむ術を、お互いに考えていきたいものですね。

(千葉市動物公園飼育係)

『十里霧中』

—— 息子たちのイギリス公立校体験記(3) ——

豊田 一秀

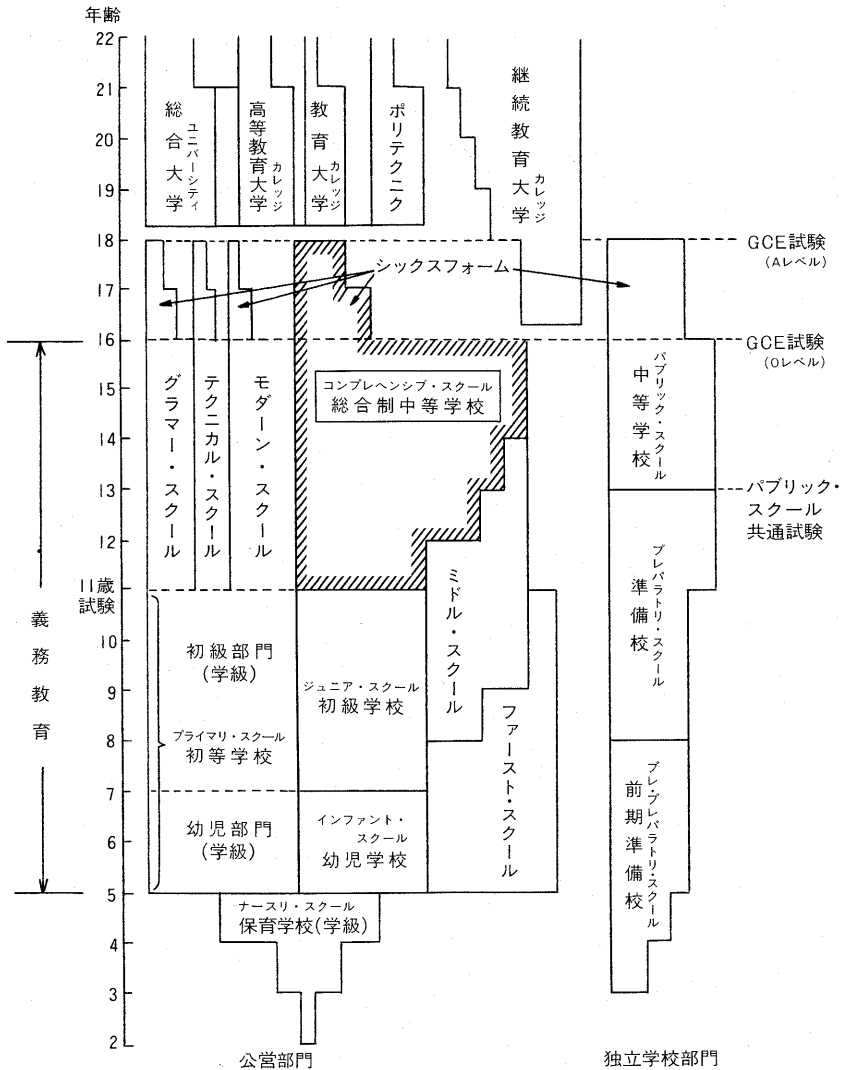
九月はイギリスの新学期である。十四歳と十二歳の二人の息子たちはイギリスの公立校に自転車通い始めた。二人の通う学校はコンブリヘンシブスクール (COMPREHENSIVE SCHOOL) と言って、日本で言えば中学校と高校を合わせたような児童数千三百人の総合制中等学校である。森に囲まれた、レンガ作り一部二階建のこの学校で、二人は、

学校が初めて体験する、そして唯二人だけの日本人の生徒として学校生活を送り始めたのであった。まず授業であるが、この学校の授業科目は選択科目も多いので生徒によって異なるが、上の息子は英語、数学、地理、理科、歴史、宗教、音楽、体育、美術、家庭科、技術科、ドイツ語、フランス語を選択した。下の息子もドイツ語をはずした以外は同じ

である。これらの授業が、当り前とは言え総て英語で行われるのであるから、息子たちの苦勞は如何程であろうか。語学に至っては、今どちらの言葉で話しているのかさえ当初は分からなかったと言う。そのような状況の中で、救いは音楽、体育、美術であった。日本にいる時からこれらの科目が好きであった二人は、言葉に頼ることの少ないこれらの科目の中で多少は自分を出せたようである。この他、数学は日本の方がかなり進んでいるので、これまで決して得意とは言えない数学であったが、文章題以外は問題ないようである。これらは先生や友達からの評価も得られたようであった。

この学校はコンプリヘンシブ（総合）が意味するように、英国の教育政策の一つとしてこれまでのモダンスクールとグラマースクールという性格の異なった学校を統合した形の学校である。近年増えつつあるこのスタイルの学校は、学校間の格差是正や教

育の機会均等などを一つのポリシーとしている（イギリスの学校制度については次頁の表を参照されたい）。そこには当然、能力的、経済的、階層的に様々な子どもたちが集まってくる訳で、このハワードオブエッフィンガムスクールにもオックスフォード、ケンブリッジに入る生徒もいれば、併設されているシックスフォーム（高校）に行かないで十七歳から働き始める子どもも少なくない。従って学校としても多様な対応を求められているのである。授業においても多くの課目は能力別に五つのクラスに分けられていて、上のクラスと下のクラスでは雰囲気が大分違うようであった。息子たちは言葉の問題があるの、下のクラスから始めてみようという事になっていたのだが、そのクラスには行動、成績、能力、意欲などにおいて問題を抱えている生徒もいて先生の苦勞も多いようである。ただ、息子たちはこのクラスの雰囲気が入ったようである。授業中に起



▲イギリスの学校制度 (稲垣忠彦編『子どものための学校』東京大学出版会より)

こるいろいろな話を面白そうに聞かせてくれた。勉強のレベルが高くなく、先生も無理をして教え込もうとすることがないので、子どもたちは親切でんびりしている。英語について行くだけで必死な息子たちにとっては居心地が良かったのかもしれない。

秋の学期が終わる頃に先生から話があって、次男のセット（能力別クラス）を一番上か二番目に変えてみたいとの話であった。理由は次男の成績が良いからというわけではなく、低いセットだといろいろな生徒に先生の手が掛かってしまうので、次男の英語まで手が回らないからという事と、もう一つ面白いと思ったのは、低いセットにしていると「悪い習慣」が付いてしまうからという事であった。先生の好意に感謝しつつも、低いセットにいる子どもたちを、暗に半ば諦めている学校の姿勢が感じられた一事であった。肝心の本人は面白い友達がいなくなってしまう上に、勉強が忙しくなってしまうと涙顔で反対

した。私は次男の気持ちも良く理解できたので、学校の好意に対して失礼にならないようにしつつ次男の意向を先生に伝えた。先生も本人の気持ちを良く理解して下さって、どうしても嫌だったら又戻してあげるから、しばらく試してみようという妥協案を出して下さり、次男も納得した。新しいセットに移った次男は、授業の雰囲気が全く違うと驚いていた。幸いなことに、次男は新しいセットの雰囲気に慣れ、友達も出来てそこに落ち着いた。

友達と言えば、こんな出来事もあった。十月の初旬、学校から帰って来た次男が「これから家に友達遊びに来てくれる」と張り切っている。しばらくすると自転車に乗った少年がやって来た。我が家に初めて来てくれた子どもの客人である、両親も内心緊張気味に迎える。なかなか堂々とした態度で自己紹介すると、二人は庭に出て会話し合い話もないままに長い間サッカーをしていた。スポーツ様々で

ある。その日以来彼はよく家に遊びに来るようになり、おやつを食べた後、夕方までいる日もあった。あまりによく来るので、少しも困りはしないものの、はて?と思っていると、ある日、その子と次男の入っているサッカークラブの監督が家にみえて、その子について語り始めた。話によれば彼の父親は継父で、経済的にも苦しくて、その子に暴力をふるう時もあったりするらしく、決して良い家庭環境ではないそうなのだ。学校でも友達が少ないので、宜しく面倒を見てやって欲しいとのことであった。監督の奥さんは次男たちの学校の先生をしていることもあって、よくその子の事を把握できているようであった。私達はその子がよく遊びにくる理由が少し理解できたような気持ちがあった、と同時にどこの国でも同じような家庭の問題があるものと身近な体験を通して感慨を持った。そしてこのような地域社会の小さな問題に触れられるのも、地元の公立校に



▲うじ虫レースにみんな夢中

子どもたちを入れたおかげだと妻と話した。

最後に、秋の行事であるオータムフェア（AUTUMN FAIR）について紹介しておこう。これは学校と父母の共催で行われる一種のバザーで、売上は学校施設の充実に使われる。イギリスの学校は普通は土曜日が休みであるが、この催し物は十月の中旬の土曜日の午後、校舎と校庭を一杯に使って行われる。日本の学校で行われるバザーと比べて共通点も多いが違いも又少なくない。不要品や古本のコーナー、軽食、ワタ飴、手作りのケーキ、クッキー、植物の即売などは日本でもよく見られるが、イギリスの国民性と言うか賭け事が多いのに驚かされる。一枚二十ペンス（約三十円）で一等二百ポンド（約三万円）の当たる、番号合わせによるくじ引きを始めてとして、サイコロゲーム、回転するバーを指定の場所にくまなく止めるゲーム、おもちゃの牛の乳しぼりゲーム（一分間で絞れる量を競う。私はこの後、二、三日ペンを握る手がおかしくなってしまう

た）、果てはうじ虫這わせ競争まであって（自分の賭けたコースの虫が一位になると勝ち。妻はこれに見事勝って、二十ペンスの出費で四十ペンスを得た）、学校はさながらカジノの観を呈す。先生たちも負けじと出した店は、先生たちの幼少時の写真を示して、どれがどの先生の幼少時の写真か当てさせるといふものであった。これも御多分にもれず立派な賭けになっていた。いくら資金集めの為とは言え、日本では考えられない光景であった。この他にも、校庭で本当の車の運転を教えてくれるドライビングスクール、乗馬、ゴーカート、アーチェリーなどが行われ、秋の一日を家族で楽しく過ごすという趣向のようであった。好天に恵まれ、私達も興味津々で土曜の午後を楽しく過ごした。

学校は、この一週間後からハーftimeという十日間程の秋休みに入る。緊張の続いた息子たちもホッとできるひと時である。

（元お茶の水女子大学付属幼稚園）

「先生、きれいなお花があった」

岩上 節子

「先生、きれいなお花があった」

そう言って、嬉しそうにお庭（園庭）から帰ってきた子どもの声を背後から聴くときは、ちょっとドキッとす
る。

五歳児三十二人の子どもの担任を、たった一人で、しかも、子どもたち一人一人の自由な活動を尊重する保育形態の中でやっていく場合、実際に見えている部分は相
当に少ない。見るべく努力する部分は、果てしなく多
い。目で見えることは限られているし、耳で聞き取れる

ことも限られている。はだで感じることも、雰囲気という
なんだか得体の知れないものを使いこなすことに最大限
努力するのが、毎日の保育のベースになっているように
思う。

「先生、きれいなお花があった」

そう言う子どもの声を背後から聞くとときは、お花を見
つけ、取った時のその子の様子を、私はたいいてい見えてい
ない。だから、内心ちょっとギクッとしながら、振り返
るのである。

いったいどこのお花だろう……？

大人になると、「人間は、そうそう完璧な生き物ではないらしい」と気付く。「どこか足りないから、いいのよね。人間味があつて……」などと、足りないことをいとおしく思えるようになる。まあいつもいつもそんなに穏やかな気持ちではないにしろ。

でも子どもは違う。子どもは、大人が思っている以上に「足りないこと」には敏感で、「大きくなってでも足りないまんま」なんて現実には、絶対に認めたくない。完成体に近づくと思うからこそ、「大きくなること」に憧れる。毎日毎日「自分はとっても小さくて、未完成な生き物だ」と思い知らされながら生活しているからこそ、どんなに小さなことでも「自分の力でできること」は、子どもにとって宝物になるのである。そしてまた、「素敵なもの」をみつけると、それをとりいれ、自分自身のものにしたいと願う。子どもは、自分の力を信じたいのである。

そして、私は迷ってしまう。子どもの気持ちに共感したいという思いと、子どもの教育をしたいという思いのあいだで。

「先生、きれいなお花があつた」

「あら、よかったわね」

そう言う私の心の中は、ドキドキしている。

花壇のお花かしら？

おやま（園庭の奥の小高い場所）のかしら？

花瓶に生けてあるのじゃないわよね……？

保育者同士の会話の中では、

「雑草はいいけど、花壇のお花はねえ……」とか、「都市にある幼稚園だから、貴重よねえ。自然の草花って……」

とか、「うちの方は、自然が豊かですもの。子どもの成長のためなら存分に……。無くなるほどではないしねえ……」というやりとりは、日々何気なくかわされているように思われる。どの言葉も、その土地、その場所、そ

の幼稚園での現実だ。しかし、保育という仕事にかかわる以上、その発言にいたる根源を意識化したうえで、子どもに向かいたいと考える。

何故、自分はそう思うのか。その中身をきちんと考えているかどうかで、保育の質は変わってくるに違いない。

花壇の花は、誰かが意図的に植えたものである場合がほとんどだ。お花が好きな誰か。庭いじりの好きな誰か。それが仕事の誰か。理由はいろいろあるにしろ、何らかの思いがこめられているのは確かであろう。その思いをくみとる努力をしたいし、してほしいのである。

都市の生活はとても便利なのに、いつもなにかが欠けている感じがする。誰かがつくった物ばかりで人工的だからこそ、誰が種を蒔いたわけでもないのに、いつのまにか芽を出して、たくましく育っていく雑草に心を動かされることもある。その感動から、何かを学びとりたいし、学びとってほしいのである。本来、成長していく

力は生き物自身に備わっていて、それは人間も同じだと、いつも感じていてほしいのだ。

自然の草花は、心にとってもやさしくて、いっしょになると何だかふわりといい気もち。小枝で弓矢をつくったり、お花の首飾りでおしゃれをすると、いつもよりも素敵な気分。だけどやっぱり考えてほしい。

多くとりすぎていない？

無駄にしない？

本当に必要なものを、必要な分だけもらってる？



ありがたいと感謝してもらってる？」

「先生、きれいなお花があった」と嬉しそうな声。

「あら、よかったわね。」と振り返る私。

「あっ、花壇のお花……」

「先生、あげる」

「ありがとう。お部屋に飾ってもいい？」

「いいよ。きれいでしょ」

「うん」

「まだたくさんさいてるよ。もっとあげようか」

「う……んとね、もういい……。あのね、花壇のお花、

植えたんだ。あそこ、お花でいっぱいにしようと思った

の」

「えっ、とっちゃいけなかったの？」

「いけないっていうか……」、困る私。その場にいれ

ば、もっと別のかかわりができただろうに……。

「先生、きれいなお花があった。」と嬉しそうな声。

「あら、よかったわね」と振り返る私。

「おやまに沢山あった」

「まだある？」

「沢山あるよ」

「私もみてみよう！」

「こっちこっち、おしえてあげる！」、得意そうな子ども
の顔。こういう時は、ふってわいた幸運を、思う存分

かみしめる。子どもとともに、ただただ喜んでいられる

瞬間。何のわだかまりもなく、嬉しい思いを満喫できる

瞬間。

「先生、きれいなお花があった」と嬉しそうな声。

「あら、よかったわね」と振り返る私。

「あれれ、随分とったのね」

「うん。ぜんぶとったんだ。すごいでしょ！」

「う……ん。本当に全部、とっちゃたのねえ……」

「たいへいだったんだから！」

「……でしようねえ」

「おうちにもってかえる！ 先生、つつんで！」

お部屋に少しもらおうか、他のお部屋にもわけようか、いつそ花屋でもひらこうか。かくして子どもとの相談が始まる。

「全部はちょっと多いわねえ……。他にもわけたらどうかしら」

「先生、きれいなお花があった」と嬉しそうな声。

「あら、よかったわね」と振り返る私。

「あー、だめじゃない！ どうしてとっちゃったの！」と怒り始める私。これがなかなかとまらない。はあ、誰か私をとめてくれないかなあ。

「先生、きれいなお花があった」と嬉しそうな声。

「あら、よかったわね」と振り返る私。

「あれっ、どうしたのそれ？」

「あっちにおちてたの」

「へえ。昨日の台風、すごかったのねえ。戦後最大って

言っていたものねえ」

「ぼくんち、アンテナこわれちゃったからテレビみられないの」

「わたし、おうちがとんでっちゃうとおもった」、ひとしきり台風体験談で盛り上がった後のこと。ふと園庭の隅を見ると、どう考えても折ったとしか思えない花の茎だけが、ポツンポツンとたたずんでいる。「おちてたの」とはどうやら、「落とし主がいらない」「持ち主がわからない」ということだったらしい。無邪気なのか、頭がまわるのか、判断に苦しむところである。

同じ言葉で始まって、その時、その場所、その人によって、状況は常に違ってくる。違ってくるからいいのだと思う。その違いを大事にしたいと思う。違ったことが、相手にとって嬉しいような、その人にとって意味があるような、そんなかわりができるように、自分の主観を大切に、みがいていきたいと思うのである。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

編集後記

今年もカットは彌永たたえ先生にお願いしています。昨年の秋から、手描きの野線や震災の記事の「あかり」、月毎のテーマ（目次の左すみにあります）など、色々と試みてくださっています。本文とともに、カットもお楽しみいただけたらと思っています。

＊

今月の「震災後の子どもたち」の「長男と野球と震災」を読んでいると、伊勢湾台風のことを思い出されました。

そのとき、私は六年生でした。名古屋市の南部が堤防の決壊で海水に浸かり、五千人を越す死者を出し、

その後、二か月もの間、海水は引きませんでした。そんな大災害であったにもかかわらず、私が思い出すのは、運動会がなくなり佐渡おけさが踊れなかったことであり、修学旅行が春に終わっていてよかった、ということでした。

この思い出し方を、私は長い間不思議に思っていました。けれども、この記事を読んで、私にとつての「伊勢湾台風」は、小学校生活最後の「六年生」という時期を、それまで思い描いていたイメージと違うものにした体験だったのだ、ということに気づかされました。

この子も大人になって、「阪神大震災」という言葉を聞くと、そのとき六年生だったこと、野球が思っていたとおりにできなかったことを思い出すのでしょうか。

(A)

幼児の教育

第九十五巻 第二号
(一九九六年二月号)

定価四五〇円(本体四三七円)

発行 平成八年二月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112東京都文京区大塚二一一一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108東京都港区三田五一一二一

株式会社 フレーベル館

〒113東京都文京区本駒込

六一一四一

〇三一一五三九五一六六一三(営業)

〇三一一五三九五一六六〇四(編集)

振替 〇〇一九〇一二一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレーベル館にお願いします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

保育者研修シリーズ

- 園内研修資料として最適
- 保育の見直しに役立つ

新しい保育の考え方による保育技術の実践書で、中堅保育者としてこれだけは身につけておきたい保育方法が分かり、保育全体が見通せるようになる。中堅保育者の保育の見直しにも最適。

日常、保育現場で起こる疑問や迷いを、子ども理解、子どもの生活と計画、援助、環境など四種類に分け、それぞれに実践例をつけて問題点に答えたもの。子どもと保育の基本がよく分かる。

① 子ども理解のポイント



保育は子どもをよく知ることから始まる。子どもの生活の理解、育ち合いの理解、発達への理解、関係の理解などに視点を当て、ベテラン保育者が実践事例をそえて子ども理解のポイントを示したもの。



柴崎正行+今井和子 編著

B5判・128頁・定価2,000円(本体1,942円)

② 生活と計画のポイント



保育計画の作成、計画と実践の見直しをはじめ、教育課程の編成までを書きやすい記録づくり、使いやすい計画づくりに焦点をあてて生活に合わせた計画づくりを解説したもの。子ども中心の保育への見直しに役立つ本。



柴崎正行+川合貞子 編著

B5判・136頁・定価2,000円(本体1,942円)

③ 保育の展開のポイント



保育実践でむずかしいとされている援助の仕方やタイミングについて解説したもので、子どもの気づきや工夫、発想を生かした展開を中心に園生活の流れにそった展開方法をまとめたもの。子どもをいきいきと生活させる保育の見直しに役立つ。



柴崎正行+平山許江 編著

B5判・168頁・定価2,000円(本体1,942円)

④ 地域との連携のポイント



子どもの成長は環境の生かし方によって大きく左右される。保護者との信頼関係、保護者の要望と悩み、地域との信頼関係、地域の行事、環境、人材の生かし方、保育者間の連携など、地域に開かれた園づくりのポイントが分かる本。



柴崎正行+小田 豊 編著

B5判・144頁・定価2,000円(本体1,942円)

キンダーブックの
フレール館

異文化としての幼児画

—あなたへのメッセージの読み取り方—

新刊

林 健造・著

幼児の絵は特別の意味をもっています。それはあなたへのメッセージでもあります。幼児の表現を読み取ることが大切です。それを理解することによって適切な援助の仕方がわかってきます。



- 幼児の生きた造形表現がわかります。
- 発達による絵の読み取り方がわかります。
- 実際の造形表現の援助の仕方がわかります。
- 現職の園長としての保育譚^{はなし}を楽しみながら保育の心が身についていきます。



A 5判・140頁・定価1,500円 (本体1,456円)

キンダーブックの
フレーベル館